感想に触発されて

お忙しい学年末にもかかわらず、感想をまとめていただき感謝いたします。感想や質問にお応えしようと考えてみました。すると、自分のことが見えてきましたのでそれを書いてみます。春休みにでもなったら読んでみてください。

先ずは、私が出前授業を再開したのはなぜかという点です。それは、張りのある生活を取り戻したいということです。子どもたちに喜んでもらえる授業を工夫することに面白さを感じ、いろいろ考える生活ができるからでもあります。

次は、私の国語の授業についてです。出前授業ですから持ち時間はわずかです。焦点を絞ることが重要です。それを一言で表現すると、

『自学自習できる力を育てる』

になりそうです。そのことについて少し考えを整理してみます。

「自学自習」といいますが、状況は、発達段階や個人差が大きいものでしょう。しかも、学校で学ぶことには限りがあります。時間的・場所的な制約があるからです。学校で学ぶことなど高が知れているといわれる方もおられます。では、学校での学びとは何なのでしょうか。それが「できる力を育てる」ことだと思うのです。どの子にも、その力を育てる手立てを考えるのが授業であり、教師の務めだと考えてみました。

「力」をつけるには、繰り返しの訓練も必要です。それも、自ら取り組むような子どもになるように、です。また、義務教育諸学校では、どの子にも、を忘れてはいけません。家庭環境や成育歴に違いがある子どもたちが学級に集まっています。そこを踏まえて授業することです。そこで私は、『共に育ちましょう』という願いを込めて授業案を作ります。

「どうぶつの赤ちゃん」の授業では、書かれていることをどの子も理解できるように工夫しました。具体的には、①生まれたときの大きさの違い、②仲間と一緒に行動できるまでの時間の長さの違い、③哺乳動物としての共通点と食の違い、を対比できることです。一般的には、表などをプリントして書き出す内容です。でも、その手法は取りませんでした。それは、視写活動が子どもの読む・書く力の基礎を育てるからです。環境が人を育てるといいます。皆で一緒に視写する場を設けることによりどの子にも視写能力が育てられるのです。三か月も続けると、その効果の大きさに気づきます。注意したい点は、時間内で書けるところまで頑張ればよいということです。書ききれないことを否定しないことです。よく頑張って書いたな、とその労を労うことです。ただ一言、続きは家に帰って書いてご覧なさい、と話すだけでよいのです。書いてきてもよし、書いてこなくてもよい

のです。今の精一杯が大事だからです。子どもを追い詰めたらいけません。そんな子も、三か月もすれば時間内に書けるようになっているものです。子どもを育てるということは、目をかけ、家庭でやってきたときにはそれを認め、気長に育てることです。更に付け加えると、その違いの不思議さに驚くことです。

教員一三年目で初めて一年生を担任したことがあります。それは、先輩に「橘田さん、一年生を担任しなさい。それがあなたを育てることになるから」と勧められたからです。高学年の担任が多かった自分を振り返る機会になりました。これが、国語の授業に本格的に取り組むことに繋がりました。実は、私は小学校教員免許を東京都の小学校教員になってから通信教育で取得しました。理科の免許でも小学校助教諭に採用してくれた時代があったのです。ですから、一年生との生活は驚きの日々で、教師としての生き方を子どもたちに教えられました。その一つが、子どもは学級の中で育つものだと知ったことです。今も思い出すのが、鉄棒遊びです。一人できるようになると、二人目、三人目と続きます。苦手な子も、頑張りを見せ、クラスのほとんどができるようになってきます。友達ができるのをみると、自分もできるようになると考えるのが一年生です。育とうという力があるのです。環境（時間と場所）を作ってあげればよいのです。

どの子にも小学校で育てておくべきことは、『自学自習できる力』です。その基礎となるのが「音読できる力→朗読の力は発展との考え」と「書く力」だと考えています。書いたり読んだりすることは、どの教科の授業でも行いますが、国語の指導の中で計画的にその力を伸ばして行く必要があります。が、現状ではどうでしょうか。特に、どの子にもという視点で観察するとどうでしょうか。

ところで、音読できることの意義について考えてみます。「音読できる」と「考えること」ができます。それは、人類の歴史からも、子どもたちの生活歴からも分かることです。多くは、音声言語で生活しているのです。聞く力が先に育つのです。聞いたら分かることが多いのです。そこに、音読の意義があるのです。また、音読できることは、新しい言葉を獲得することでもあります。特に、漢字で表現された言葉の読み方を知ることに繋がります。教室で友達の音読を聞くということも、その助けになります。読めない漢字に振り仮名をつけさせる指導法がありますが、それは音読の力を育てることにはならないと、教えてくれる方がいました。「一読して読めない漢字には傍線をつけさせるだけにしなさい。そうすると、人が音読している時に注意して聴くようになるので覚えられる」と、また、「振り仮名があるとそれに頼ってしまい、漢字を見なくなる」と、「どうしても、振り仮名が必要だと思ったら、上か下の欄外に書かせるとよい。それは、振り仮名をつけることで安心してしまい、聞くことに集中しなくなったり、読む練習を怠ってもよいというゆるみが出たりするのを防ぐからだ」と、教えてくれました。

私は、国語の時間は原則全文の順繰り読みから始めます。それは、音読の機会を増やすことや聞きながら中身をつかむ力を育てるためです。一時間の授業は、

次時の最初の全文音読のために行うといってもよいのです。授業での気付きが、次時の音読（聴く）に味わいを付け加えるからです。授業は有機的でなくてはならないのです。その流れを螺旋的向上（同じことを繰り返すが、レベルは向上していること）と教えていただきました。それが、どの子も育てる近道でした。

次は「書く力」とは、どん力なのでしょうか。そのことを考えてみます。

「書く力」から受ける印象は、文章を書くことができる、になるでしょうか。それが目標ということでしょうか。他にも、文字を正しく美しく書く=書写のことを指すこともあります。漢字の書き取りということも入るかも知れません。メモや構成メモを作ることも含まれそうです。視写も書くに含まれますね。

作文は表現活動です。表現活動は高度なことです。幼児を見ると、そのことがよく分かります。親や周りの者の話は理解できても、自分の気持ちや伝えたい事柄をうまく表現できません。周りの大人がそれを忖度して、援助したりします。また、この人は自分にとって敵か味方かなどを直感的に判断する能力は発達していますが、分析したり関連性を考えたりする力は育っていません。文章を書くということは、客観的に自分を観察できることと深く関係します。また、書き慣れるということとも深く結びついています。そう考えると、読んだり聞いたりして理解する力を育てることが先行するということです。その理解の助けになるのが、最もゆっくり読む、手で読む視写活動です。教材の核になる部分を書き出すのですから内容がより詳しく分かります。また、子どもたちが作文するためのお手本になるような文を視写するのですから、たくさんの手本を身につけることにもつながります。さらに、この力をどの子にもつけるために視写の時間を保障することも重要です。私はそう考えて、毎時間一〇分程度、視写するようにしています。

私は、作文の授業も大事にしています。自分の考えを作文用紙一枚程度にまとめる力を養うようにしています。天声人語も六〇〇字ほどだそうですが、書く内容を絞って書けるようになると、その題を小見出しにして組み合わせると長い話も書けるようにもなります。どの子にも書く楽しさを味合わせ、書く力と意欲を育てるためには、短い作文を書かせながら継続し、螺旋的向上を図るのです。その秘訣は、書きたいことを書かせることです。これで、私は、作文の時間が嫌いだという子がいなくなりました。最近は、作文の時間を時間割に組み込むことが難しくなっているようですが、工夫してみてください。また、読みの指導の最後に感想文の指導を入れることも工夫の一つです。それぞれの子どもの受け止め方の違いを知る機会にもなります。児童の話し合いの時間が十分に確保できない指導法を取っている私は、出前授業でそのことの意義を感じ、感想文の授業をさせていただいたこともあります。その時の子どもたちのお礼状を読み、今後も感想文指導の工夫を続けたいと強く感じました。

視写をさせる時には、マスいっぱいの大きな字で鉛筆の色が出るようにと促します。それが、整った字が、正しい字が、書けるようになる近道だからです。子

どもたちには、書写の時間に点画の特徴を指導しますが、視写の時間には教科書をよく見て書きなさいと伝え、余り余計な注文はしません。代わりに、教師は大きな字でチョークの白さが出るように、また低中学年では、点画にも意を払って板書します。子どもは、先生の言うことよりもやることを真似るものからです。

短くても集中する時間を確保することが、どの子も育てる秘訣です。短期記憶・ワーキングメモリー増強の訓練には視写が効果的です。老化防止に写経を勧める脳科学者もいます。また、聴写も集中力を育てます。特に、漢字仮名交じり文が標準になっている日本語は、聴写するのが難しいです。漢字・ひらがな・カタカナ・数字を書き分けなくてはならないからです。集中力を必要とします。その聴写を作文指導で取り入れるのです。批正の時間に代表作品を聴写させます。友達の作品は聴写の抵抗感を下げる働きがあるからです。そして、その作品よさを探るのです。これが、作文嫌いな子をなくす手立てにもなるのです。面白いですね。

発問についても、大事な点を指摘していただきました。問答は説話の変形だと教えていただきした。子どもの中に湧きあがる疑問や関心を明確にすることが、問いの大きな役割です。答えは自得させるのが一番ですが、話の流れによっては担任が自問自答してもよいですし、子どもに任せてもよいのです。大きなことをいえば一生の疑問が芽生えるだけでもよいのです。子どもの心が動くこと、頭が働くことが大事なのですから。教材研究するということは、子どもたちは何を感じるだろうかと想像することです。そこから問いも生まれてきます。よい発問ができたときには、子どもたちの心が全開し、意欲も高まります。あっという間に授業が終わったと感じ、その短さに驚くこともあります。子どもたちの話し合いの時間があるなしにかかわりなく、多くの子にそんな体験を与える授業を目指しています。子ども同士の話し合いがないのはよい授業ではないというのは、教育界の固定観念のようにも思います。

授業の構成は、一読して大づかみする力を育てること、そこを踏まえて大事な言葉を書き出し、文章を概観する力を育てることが一時間目の授業です。次が、文章の山を踏まえて、そこを詳しく読むことが二時間目以降の授業です。文章の山の数によって時間数を決めます。その後に、中身をつかんだ目で文章に使われている文字・語句の働きを考えます。新出漢字などの指導をします。例文作りなどを通して学ぶこともあります。内容によって時間数は変わってきます。教科書のふろくの活用も合わせて行い、自学自習の方法も学ばせます。

今回はここまでにします。考える機会を頂き、感謝申し上げます。来年度も声をかけていただけると嬉しいです。参考事例も同封します。一言お礼まで。

平成三一年三月二十日

様